

# 隼人族の森を渡る風

創造の現場から 第35回

森の彫刻家 上床利秋

## 何故か宮沢賢治……

私の知人に医師で70歳代の先生がおられる。その方の姿や性格は魅力あるチエロ弾きのポーズとして作品になると直感した時から今年の日展制作は始まった。今を思えば、7年以上も前から杉アトリエにて乾燥させていた楠に新しい命が見えた瞬間である。

チエロ本体はインターネットを利用して廉価で入手出来たから、インターネット動画で奏者のしぐさを学習しておいて実際のモデルさんの風貌を重ね合わせ、それに自分の思いを彫刻にすることにした。

初めに私は等身大の粘土像を作してみた。木彫や石彫はカービングとしてやり直しの効かない手法なので、粘土でいったん試作してみると、苦労は増えるけれども表現に迷いごとが少なくなつて、説得力が増し、追及の姿勢がぶれずに仕上がるという効果がある。8月、粘土による試作がある程度まで来たところで、反省点をもとにいよいよ楠の木に取り組み始めた。



粘土にほる試作。ステージ発表時をイメージ。



モデル風景。時には差し入れまでして頂いた。感謝。



原木にチョークでデッサンしてからチェーンソーを入れ始める。



完成作品。国立新美術館で展示。11月1日から24日まで日展で会員作として発表。



粗彫り

粘土による表現は自由な分、こうでなきゃならないという強い自己主張が表現技術による巧さで裏打ちされなければ鑑賞者を満足させられない。それに比べて「塊」から彫る表現は当然原木の姿から削り取るという制約がある。その分鑑賞者からは労作という褒めの言葉をもらいやすい。しかしながら粘土ではできた形が、原木からでは物理的に見ても小さくて困難であるということが分かった時、いかにしてポーズを変更してより良い木彫の作品として表現できるか。それは制作者の才能で決まってしまうと私は考えている。

今回はチエロソニーによる利便性を活かしつつも、削りすぎによる表現の甘さを警戒し、次第に手鑿に変えていって、より細やかな表情を加え完成に近づけたつもりである。親しき友人たちにラインで制作

過程を紹介していたら、ある人が「セロ弾きのゴージュ」だねと感想を述べてくれた。なるほど、言われてみて改めて物語を読んでみることにした。物語冒頭の、指揮者からまずい個所に指摘を受けて、何度か繰り返してもうまく弾けないゴージュが自宅で夜練習を繰り返す姿は、自分がイメージしていた作品と同じだと思えた。それにしても原作者の宮沢賢治の言葉に、私は何歳になっ

ても学べることの、生きることの意味を考えさせられる。今回の作品を仕上げながら、ゴージュは、モデルが知人の医師先生でありながらも、一向にいい作品が創れないでいる自分であるような気がしていた。作品はごまかしがあつてはならない。今回の制作について、「今の私の精一杯の仕事です」と解説するところが、嘘のない真実であるような気がしている。

日展会員 第一幼児教育短期大学 教授

この森のアトリエで彫刻を共に作ってみませんか

ホームページ刷新しました。

<https://douzou.jp/>

上床利秋

検索

このページのバックナンバーも読むことができます。

## レモン画材絵画教室 **ご案内**

- 隔週水曜日 10:00～ 油絵・水彩教室
- 隔週土曜日 16:00～ 油絵・水彩 教室
- 隔週日曜日 16:00～ デッサン
- 隔週土曜日 ①10:00～ 子供絵画教室  
②13:30～
- 月1回第2木曜 10:00～ 和紙ちぎり絵教室

★ingミニセミナー〈POP文字・筆文字・絵手紙など〉チラシ等で随時ご案内致します。

お申し込みは TEL 0995-45-1015 国分進行堂・レモン画材まで